

大槌町東日本大震災津波

追悼式

3月11日午後2時46分、鳴り響くサイレンの音とともに、今年も大槌町は、静かな祈りに包まれました。東日本大震災から6年。復興による工事で日々街並みは変化し、季節が巡るごとに、それぞれの心も少しずつ変化しています。それでも、大切な人を失った悲しみの重さは、変わることはありません。



大槌町東日本大震災津波追悼式が町役場多目的会議室で行われ、式典には約450人が参列、約700人が献花に訪れました。はじめに、震災犠牲者の人となりをご遺族から聴き取り記録した「生きた証 回顧録」の第一版を平野公三町長が祭壇に奉納。平野町長は式辞で「私たちはあれから6年、年を重ねました。復興事業により街並みは変わっていますが、決して皆さまを忘れません。あの津波の恐ろしさや悔しさをしっかりと子や孫に伝えていきます」と犠牲者に語りかけました。



この傷は、
忘れることでは癒えない

佐々木栄光さんが、ご遺族を代表して「忘れることで震災の傷が癒えるのではありません。心の復興には、図面も、工期も、完成もない。長い年月をかけて、それぞれのスピードで、心の空白を埋めていけたら」とあいさつ。佐々木さんのご両親の行方は、いまだに分かっていません。



灯りに思う あの人の笑顔

シーサイドタウンマストの駐車場で、今年も「3・11集い」灯火(ともしび)が開かれました。メッセージや絵が描かれたペットボトル製の手作り灯ろう約800個にろうそくが灯され、夕闇に「3・11」の文字が浮かび上がりました。参加者は小雪が降る中、冷たい風に吹き消えるろうそくに何度も火を灯し、6年という月日と穏やかに向き合いました。また、七回忌への思いを込め、海では灯ろう流しが行われました。大槌湾で780個、船越湾で5

20個の灯ろうが海を彩りました。長く連なる光の粒が、震災で失ったものの大きさを物語ります。海に向かって静かに手を合わせる人、灯ろうをじっと見つめ続ける人…。それぞれが一番会いたい、あの人の思い浮かべながら、流れゆく灯ろうに思いを託しました。



この町の未来 担う決意

生徒代表の吉里吉里学園中学部8年の岡谷開紀さんは、避難所や親戚宅を転々とした当時を振り返り「久々におなかいっぱい、おいしいご飯を食べさせてくれたこと。小学生の私と遊んでくれたこと…。中学校生活を精一杯送ることが、支えてくれた多くの人たちへの恩返しです」と述べ「これからの大槌町の未来を担っていく」という決意を、追悼の言葉として述べた。

